

成果報告書

記入日 2022年 11月 15日

| | | |
|--|---------------|--|
| フリガナ：(コダマ エミ) 氏 名： 児玉 恵美 | 渡航先国名 レバノン | 留学先の所属機関：ベイルート・アメリカン大学 帰国後の所属機関：東京外国語大学 |
| 研究テーマ：レバノン内戦の記憶：追憶と継承の場としての墓地に着目して | | |
| 研究期間： 2021年 11月 ～ 2022年 11月 (1年 ヶ月) | | |
| 研究成果（概要） 戦闘の最中にレバノン国内にいた3人に1人が故郷を強制的に追い出されたと推定されるレバノン内戦（1975年～1990年）を事例として、内戦後の社会で、レバノンに暮らしている家族が内戦の記憶をいかに想起し、故郷と祖先にまつわる記憶の継承と変容がどのように生じているのかを調査した。 | | |
| 研究成果（詳細） 【研究の背景・目的】 本研究の目的は、レバノン内戦後の社会で、キリスト教マロン派とイスラームのドゥルーズ派の家族がいかに故郷と祖先を想起し、どのように記憶の継承と変容が生じているのかを調査することであった。レバノンではキリスト教、イスラーム、ユダヤ教の18もの公認宗派に属する人々が、「宗派主義」という政治体制の下で暮らしている。この土地に様々な宗教・宗派が混在する背景には、レバノン山地が歴史的に、各地で迫害された宗派集団、民族・エスニック集団の避難地として機能してきたという経緯がある。宗派間紛争という形態で15年間にも及んだレバノン内戦において、戦場となった土地に暮らす人々は、殺傷されたり、誘拐されたまま行方不明になったり、移住を強制されたりした。 内戦中、レバノン国内にいた人口の3人に1人は、他宗派の民兵組織やイスラエル軍などによって故郷の村から追放され、避難民化したと推定される。その後、多くの避難民が、故郷に残して離れざるをえなかった家屋と土地を他宗派の人々により占拠されたこと、あるいは、家屋や礼拝所の破壊、墓地の冒涇にも直面したことによって、異なる宗派の人々の間で憎悪・不信感が増大してきた。本研究は、オスマン帝国期から対立してきた歴史を有するマロン派とドゥルーズ派を対象として、故郷の村からの強制的な追放（とそれに伴う家の喪失）、土地をめぐる意識と記憶に着目する。内戦後、レバノン国内の人々が戦時中に別離を強いられた故郷をどのように想起しているのか、ならびに、各々の宗教・宗派に帰属しながら、祖先とのつながりをいかに保持してアイデンティティを再構築してきたのかに光を当てる。 従来、レバノン内戦の記憶を対象とする先行研究は、政治的・軍事的指導者または芸術家が公的領域において、いかに内戦の記憶やナラティブを生成してきたのかを検討するものが多い。他方で、本研究はレバノン人の家族史に焦点を当てる。これにより、故郷の土地から触発される想起と忘却を通して、レバノン内戦を生き抜いた個々人にとっての、故郷と祖先とのつながり、内戦の記憶継承を検討することを目指す。 | | |

【実地調査と成果】

1. 内戦期における墓地の冒涇に関する資料調査

内戦中、ドゥルーズ派民兵組織がキリスト教マロン派の住民を故郷の村から強制的に追放した際に、生者の追放のみならず、彼らの死者が埋葬された墓の冒涇までなされた社会的・宗教的背景について理解を深めるため、資料調査とインタビューを行った。これまで先行研究によると、墓は、内戦期の戦闘の一つである、ドゥルーズ派民兵組織とマロン派を中心とする民兵組織が衝突した「山地戦争」(1982年～1984年)において冒涇されたことが記述されている。まずは墓の冒涇行為が起こった背景と詳細を知るために、ベイルート・アメリカン大学とフランス中近東研究所に所蔵されている、避難民省が刊行した資料や、内戦期の避難民を取り上げた資料、内戦期の前後におけるレバノン山地県の地図(墓地の位置が明記されたもの)を収集した。避難民省はレバノン政府によって1993年に、避難民の支援を目的として設立された。それは主として、村ごとの戦後和解の推進、住宅融資、破壊されたインフラなどの再建を役目としている。資料から得られる知見について、分析途中であるものの、現時点で注目したいのは、避難民省刊行の資料によると、レバノン山地県(シューフ郡、アレイ郡、バアブダー郡)の157村のうち、少なくとも78村(50%に相当する)で墓地が破壊され、修復が必要とされている点である。すなわち、内戦期にレバノン山地において、少なくとも半数の村で墓地が破壊されていたことを指摘できる。また、墓地が破壊された手段は村ごとに異なるものの、ダイナマイトで爆破され、そこに埋葬されていた遺体が掘り起こされた事例や、民兵が墓地に向かって銃を乱射して、墓地が損害を受けた事例もあることが分かった。

また、レバノン人キリスト教徒によれば、墓地の冒涇は「山地戦争」のみならず、レバノン国内の他の地域でも起こっていたこと、ならびに、墓の冒涇は神聖なモノの破壊に相当するために、この話題について語ることで自分がレバノン社会でタブー視されていることが分かった。他方で、レバノンの人々は話し相手に対し、自分が踏み込まれたいくない一線を相手を超えないように牽制する目的で、「墓を暴くぞ」という表現を日常的に使うことから、「文化に暴力が根付いている」一例として語られることもあった。

以上のように、マロン派とドゥルーズ派の戦闘では、内戦期に故郷の村を追放されたり、墓地や礼拝所を始めとする神聖なモノが破壊されたりした。そうした戦争経験を有する人々は現在、いかに故郷の土地を意識・想起し、自らのアイデンティティを再構築してきたのかについて調べる必要があると考えた。そこで、ドゥルーズ派とマロン派に帰属する家族とともに過ごす時間を大切にしつつ、実地調査を行った。

2. ドゥルーズ派とマロン派を対象とする実地調査

平和構築を活動目的とするNGOからの紹介により、ドゥルーズ派とマロン派の元戦闘員への聞き取り調査を行った。ドゥルーズ派民兵組織は「山地戦争で勝利した」ため、ドゥルーズ派の元戦闘員は先祖代々住み続けてきた土地に、親族どうしで隣り合い、現在でも住み続けていた。一方で、マロン派の元戦闘員の家族は「山地戦争」後、山地に帰還することができなかった期間に、先祖代々暮らしてきた築300年の家をドゥルーズ派の人によって占拠された経験を持つ。両者はともに、「レバノンには18の宗派が存在するのと同様に、18ものコミュニティに分断されており、コミュニティごとに異なる文化、生活・思考様式を持っている」ことを問題視した。その上で、すべての宗派の人々が「レバノン」として一つに結束するべきであることを強調した。一方で、彼らもまた、他の宗派の人々に対する不信感や嫌悪が時には表出することもあり、人々の心に内戦の傷跡がいかに深く刻みこまれているのを感じずにはいられない一面も伺えた。

ドゥルーズ派家族： 山地県シューフ郡の村に住むドゥルーズ派家族の家に宿泊させて頂き、ドゥルーズ派の文化や思想、生活について学ぶ機会を頂いた。その中で、ドゥルーズ派の宗教指導者であるシャイフにインタビューさせて頂いたり、避難民省による戦後和解が 2014 年になってようやく締結された村の住民にインタビューさせて頂いたりした。

ドゥルーズ派の家族と一緒に時間を過ごした中で、特に印象に残ったのは、故郷の土地への意識と、家族の死者への追悼の在り方である。まず前者に関して、ドゥルーズ派の人々にとって、土地は神とつながるものと考えられていた。すなわち、土地や自然は神から授かったものであり、それを大切に世話するのが人間の役割だと捉えられていた。後者については、ドゥルーズ派の人たちは輪廻を信仰しており、ドゥルーズ派が死亡すると、当人の魂が別のドゥルーズ派の身体に移り、前世の記憶を持ったまま生まれ変わる。紙幅の都合上、詳細に記述することが叶わないが、彼らは死者を追悼する場所を持たないことが分かった。しかし一方で、50 代の女性は、内戦中に戦闘員として戦いに身を投じて殺害され、遺体が行方不明のままである夫のこと、コロナ・ウイルスに感染し急逝した母親のことが忘れられず精神的に苦しみ、いつも家族写真を鞆に入れて持ち歩いていた。夜中に月を見ながら、家族の死者のために礼拝していた彼女の姿を通して、家族の死者の魂が既に他の身体に生まれ変わっていても、死者を追悼する場所がなかろうとも、教義を超えて、哀悼の想起を捧げ続けていた様子がうかがえた。

マロン派家族： 報告者はキリスト教徒の村であるマトウン県マンスーリーエ村のアパートで暮らし、内戦期に故郷を喪失した経験を持つ人々を対象として調査を行った。マンスーリーエ村を住処として選んだのは、レバノン国内の至る所から発生したマロン派の避難民の多くが、内戦後にこの村に定住したためである。マンスーリーエの居住者によると、もともとマンスーリーエ帯は松の森であったが、内戦後にあたる約 30 年前に松の木々が伐採され、新しい道や建物が作られたのだという。マンスーリーエでは、近隣の家族から、よくコーヒーに誘って頂き、彼らの家で家庭料理をご馳走して頂いたり、故郷の村に連れて行って頂いたり、毎週日曜日には教会のミサと一緒に参加したりして、感謝してもきれない思いである。故郷の村では、先祖代々住んでいる築 150 年の実家に連泊して葬儀に参列したり、親族が集結する夕食パーティーに招待頂いたりした。故郷の土地と家を 2 度も喪失した経験を持つ家族とともに、その失われた二軒の家を見に行った際には、その父親が車中で「私はこの家で生まれたんだよ」、また「あれが私の家だ」と言いながら遠巻きに指し示すことしかできず、既に長らく他宗派の家族が住みこんでいるその家に近づくこともできなかった。

マンスーリーエでの調査を通して、内戦期に避難民化した人々にとって、喪失した家と土地を中心とする故郷にまつわる記憶、そしてレバノンという場所をめぐる意識と記憶に光を当てていきたいと考えている。マロン派の多くの人たちは生まれ育った故郷の村に愛着を深めていたのみならず、レバノンというナショナルな領域もまた、キリスト教の教義と結びつけられ、「神がおわす神聖な土地」として認識され、彼らの土地への愛着に大きな影響を及ぼしていた様子がうかがえたためである。

気づきと今後の課題： 以上を総じてみれば、残虐行為の発生後も、そこに残された痕跡や残骸に着目することで、暴力の影響力が長期的に持続してきた側面が浮かび上がってくる。内戦という暴力構造に巻き込まれた人々が戦争後、その場所に残された過去の暴力の痕跡や残骸、あるいは、残骸さえ何も残らなかった現実といかに向き合い、どのように折り合いをつけてきたのか今後も分析を続けていきたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

「ここには電気がない、水がない」という同じ言葉を留学中に何度も耳にした。レバノンでは2019年以来、経済危機が深刻化し、物価や燃料価格が日々高騰するなか、本報告書を記入している現在、現地通貨・レバノンポンドの価値は30分の1まで暴落するに至った。経済危機により、レバノン国内の4人に3人が貧困状態に陥ったと推定されている。とりわけ、レバノン国内の人々の生活苦しさを助長しているのは、この3年間、レバノン国内の銀行に預けたドル現金の引き出しに制限がかけられていることである。そのため、手持ちの現金と月々の収入を頼りに生活していくほかない。だが実際には、給与も月に100ドルまたは200ドルしかもらっていない親世代がたくさんいた。例えば、スイーツ店で働くレバノン人男性（50代）の給与は、経済危機の以前には月に800ドルであったが、2022年9月時点で200ドルまで下がった。これでは生活費も発電機代も、彼の娘の授業料も捻出できないため、他の仕事も掛け持ちするようになったという。それでも合計で月に400ドルしか稼ぐことができなかった。道端で出会った軍人（30代）は危機前に月に1500ドルを稼いでいたが、同年9月時点で100ドルまで下がったと語った。

そうした経済的・政治的苦境の中、自分の預金の引き出しを求めて、銀行を襲撃する事件が頻発した。銀行の周りには、襲撃者を支持する人々が、自分の預金の引き出しを求めて集まる事態となった。このように銀行から預金を引き出すという、当たり前だと思っていた行為さえ行うことができなくなり、預金を失ったも同然となった。襲撃者は自分の預金の引き出しに成功した分を家族に渡し、彼自身は逮捕されたケースもある。これらの事件に対し、友人は「政府が私たちの預金を盗んだのだ！」と語った。

経済危機下のレバノンに身を置き、頻りに耳にしたのは「これは武器を使わない、新たな戦争だ」、「レバノンに居ても将来に希望がない。若者は海外に出て行くしかない」という絶望的な言葉であった。これらの言葉はキリスト教徒もドゥルーズ派もシーア派もパレスチナ人も、様々な宗派に帰属する人々によって語られていた。海外で親族が働き、仕送りを受けられる家族は、発電機代を支払い、太陽光発電を設置することが可能であった。だが、そうでない家族は、一日につき一時間ほどしか届かない、いつ届くのかも分からない、政府の電気が来るのを待ち続け、夜には蠟燭に火を付けて過ごすしかない。

今後の社会貢献

上述の通り、レバノン国内の多くの人々は、内戦期において喪失した家や土地、さらには死別した家族をめぐる記憶を抱え、想起、継承してきた。それに加えて、日々深刻化する経済危機の下、多くの人々がいかに経済的苦境に追い込まれていたのかを、日常生活での言動を通して垣間見ることが多かった。

「私のために祈ってほしい」と言われたことも多々ある一方で、そうした困窮に苦しんでいたからこそ、報告者のように国外からドル現金を持ち込んでいることが想定される「外国人」を利用しようとした人も少なからずいた。

今後の社会貢献として、人々が直面してきた困難や悲しみに寄り添い、紛争後の社会再構築、紛争の記憶継承と変容に光を当て、人々の顔が見えるような形での中東の政治文化の理解に貢献することを目指している。今回の留学経験を通して強烈に感じたのは、人々が他者に対して、これだけは許すことができないという憎悪を抱えて生きることを余儀なくされている側面であった。紛争後の他者との関係作りの歩みにおいて、人々が抱えざるを得なかった憎しみをいかに直視し、向き合っていくべきなのか、この点を今度の課題としていきたい。

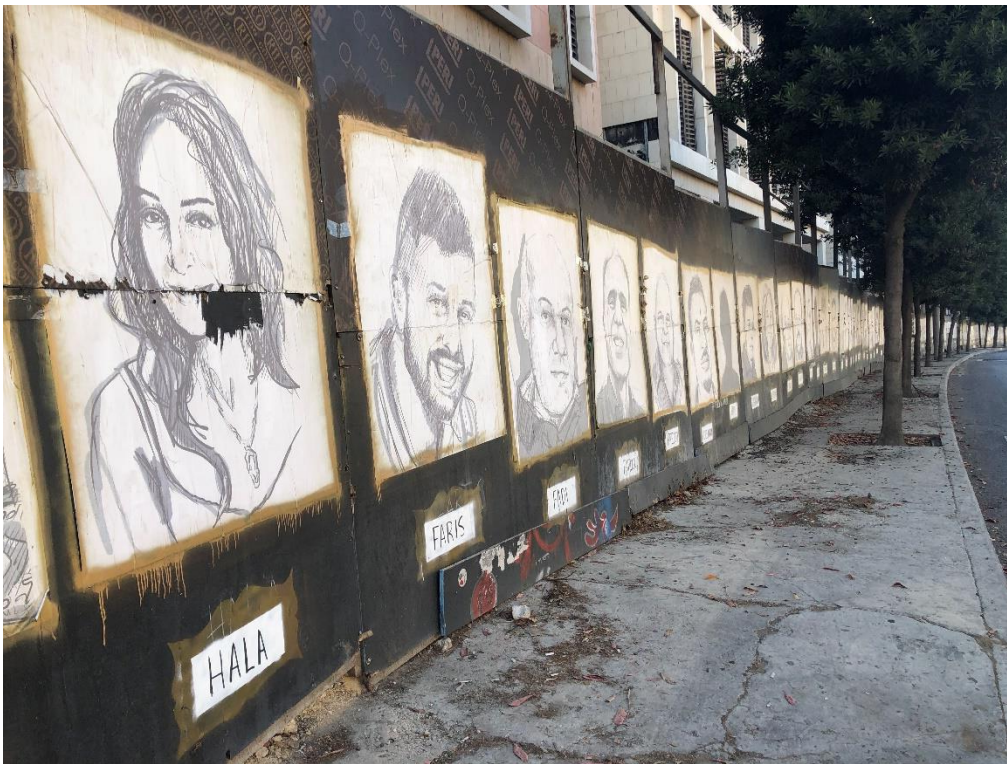


写真1：2020年8月4日に首都ベイルートにある港で大爆発が起こり、221人が死亡し、約30万人が家を失ったと推定される。港付近の通りの壁には、この爆発事故で死亡した「殉難者」の名前と似顔絵が描かれている。



写真2：ハリーサーにあるバシリカと教会の横に聖シャルベルと写真撮影が可能なスポットがあった。聖シャルベルはレバノン生まれの聖人である。レバノンに行くと「シャルベル」という名の男性に頻繁に出会うのは、彼に由来している。



写真3：ベイルート市内でパン屋を営むパレスチナ人女性。レバノンの朝食と昼食に定番なマンウーシェを作っているところ。経済危機により、彼女の夫は失業したため、彼女がパン屋を続けることで、家計を支えている。だが、ガス代や電気代、材料費が高騰し、店を閉めようか日々悩んでいた。